高校柔道部員のコーチに対する信頼感の競技レベルによる違いと学校差

岡田弘隆*・金丸雄介**・小野卓志*・増地克之*・山口　香*・市村操一***

Differences of trust in high school teacher-coaches among judokas of different performance levels and in different schools.

OKADA Hirotaka *, KANAMARU Yusuke **, ONO Takashi *, MASUCHI Katsuyuki *, YAMAGUCHI Kaori * and ICHIMURA Soichi ***

Abstract

Purpose: Purpose of this study is to confirm the precedent pilot study on the interpersonal trust of high school judo athletes in their coaches, which was made by Okada, Yamaguchi, Kanamaru, and Ichimura[9]. In the pilot study it was found that the interpersonal trust of Japanese high school judo athletes in their coaches was weaker than that of Australian athletes.

Measurements: A questionnaire mainly used in this paper was ACAT developed by Zhang and Chelladurai[13]. Another scale was added to measure the degree of athletes' internalization of the educational ideas of judo advocated by Jigoro Kano.

Participants in this study: 492 judo athletes from 37 high schools were divided into two groups. Athletes of the schools which took part in the national inter-high school matches formed Group A (N=91) and other athletes formed Group B (N=358).

Results: Judo athletes' trust in their coaches was not so high as to be rated 4.30 in average on seven point scale. Compared with Australian university athletes, whose average point on trust scale was 5.61, Japanese young judokas seemed not to trust in coach. Evaluations of perceived traits of coach, which were considered as antecedent to trust, were also not as high as Australian athletes' evaluations. Group A indicated significantly greater trust in coach than Group B. The school difference in trust in coach was also statistically significant. Gender differences were not found in trust and its related psychological traits. Internalization of Kano's judo spirit was not enough among high school judo athletes.

Key words: Trust in coach, Judo, Coach-athlete relationship, Jigoro Kano, Spirit of judo

コーチに対する競技者の信頼感は技術の指導の点でも、スポーツ生活を楽しく過ごすためにも重要な要因であると考えられる。人の他者に対する信頼は自分自身への信頼などとは区別されており、現代の心理学のなかで interpersonal trust とよばれている[2),3)]。わが国では天貝[1)]によって対人信頼感と訳され測定尺度が作られている。

対人信頼感の定義にはさまざまなものがあったが、現代の心理学のなかで広く使われている定義にはつぎのようなものがある。その中には単に trust（信頼感）を対人信頼感として定義しているものもある[6)]。

* 筑波大学体育系
Faculty of Health and Sport Sciences, University of Tsukuba
** 了徳寺大学
Ryotokuji University
*** 筑波大学名誉教授
Prof. Emeritus, University of Tsukuba

Mayer, Davis, & Schoolman[7] は、「(信頼感とは)、特定の当事者がもう一方の当事者の行為に対して無防備（vulnerable）でいる心の構えのできている状態である。その状態は、もう一方の当事者の行為を監視したりコントロールしたりすることはできなくとも、その他者は信頼する者にとって大切な行為をしてくれるだろうという期待に基づいている」と定義している。

Six[10] は、「対人信頼感とは、他者の言葉や、行為や、決定に基づいて行動することを積極的に行い、そのことに自信を持っている状態の程度である」と定義している。

このような対人信頼感は競技者がコーチの指導を受けるときには重要な基本的心理状態の一つと考えられるであろう。会社や団体の心理学を研究する組織心理学のなかではリーダーと成員の対人信頼感を高めることは、組織の生産性と成績を向上すると報告されている[2),6)]。

スポーツにおけるコーチングの心理学のなかでは、指導者個人の心理学としてのリーダーシップの問題は研究されてきたが、コーチと競技者の間の対人関係の研究は十分ではなかった[9)]。その研究史の展望は岡田・山口等[9)] の論文に示されたようなものである。その中での注目すべき研究は Zhang & Chelladurai[13)] によるものであった。彼らは信頼感を生み出す条件としてコーチの「有能さ」「善意」「誠実」に加えて「公正」の 4 つの特性が競技者によって評価されることが重要であろうという仮説と、「信頼感」のレベルが「コーチへの協力」「コーチへの関与」「競技者の成果の認知」などに関係するだろうという仮説を、オーストラリアの大学スポーツクラブの競技者（215 名）の調査の統計的データによって確かめている。

Zhang & Chellandurai[13)]は、この研究のために「競技者のコーチへの信頼の前提条件と結果」(Antecedents and Consequence of Athlete's Trust: ACAT）という質問紙を作成した。この質問紙の邦訳を使用して、筑波大学の柔道研究室は高校柔道部の競技者の観点からみたコーチに対する対人信頼感の研究を発表している[9)]。その結果は、コーチに対する部員の信頼感はオーストラリアの大学スポーツクラブ員と比較して低いものであった。しかし、この研究の調査参加者は 12 校、141 名であったために、評定の対象となったコーチの数が限られており、調査結果を日本の高校柔道部の一般的傾向として敷衍することには問題があると考えられた。本研究では調査参加校と競技者の数を増やすことによって、先行研究の結果を確かめることを意図した。

スポーツにおけるコーチに対する対人信頼感（信頼感）の研究の流れを踏まえて、本研究での目的は次のように設定された。

1. 高校柔道部の競技者のコーチに対する信頼感についての 2015 年の研究に、さらに研究協力者を増やして、統計的データの分析結果の信頼性を高めること。
2. 先行研究[9)] の考察の項で提示された仮説、つまり競技レベルの高い学校のコーチに対する信頼感は高いであろうという仮説を検証し、同時に性別による信頼感の違いを比較検討する。
3. 信頼感に学校差がないかどうかを検討する。
4. 信頼感のレベルが、競技者の認知する成績の向上とどのような関係にあるかを検討する。
5. 信頼感のレベルが「柔道の教育的理念」の受容にどのように関係しているかを検討する。

方　法

質問紙

Zhang & Chelladurai[13)] による「競技者のコーチへの信頼の前提条件と結果」という質問紙（以下 ACAT と表記）の岡田等[9)] による邦訳版を使用した。この質問紙は次の 3 つの領域から構成されている。(1) コーチへの信頼感の程度、(2) 信頼の前提条件としてのコーチの性格特性、(3) 信頼感が及ぼすと考えられる結果。1 番目の信頼感の程度は 2 項目の質問で測定される。2 番目の領域は、信頼感に影響を与えると思われる前提条件であり、「公正さ」、「善意」、「誠実」、「有能」の 4 つの下位領域を測定する質問項目が含まれる。3 番目の領域は、コーチへの信頼感の変化によって影響を受けると考えられる領域であり、「コーチへの関与」「コーチへの協力」「成果の評価」の 3 つの下位領域を測定する質問項目が含まれる。ACAT の 3 つの領域に関して合計 24 項目から構成されていた（付表参照）。研究協力者である競技者はコーチに対する感じ方を「きわめて当てはまる」(7) から「まったく当てはまらない」(1) の 7 段階で評定した。

もう一つの質問領域は嘉納治五郎の書き残した柔道の教育的理念が柔道競技者によって受容され、内面化されている程度を調べる質問を 4 項目準備した。項目数を限定したのは、質問紙全体が長くならないように配慮したためであった。質問項目は本論文の著者の中の柔道の専門家と、外部の柔道の実技と理論を専門とする大学教員、合計 8 名が村田[8)]、生誕 150 周年記念出版委員会[11)]、山口香[12)] などの嘉納の柔道教育の理念について書かれた文献の中

から合議によって選択した。選ばれた質問項目はつぎの4項目である。この4項目の質問紙は岡田等（2015）によって「嘉納尺度」と命名された。

1. 柔道の理論を日常生活においても活用しようと心掛けている
2. 他者に勝ることより、相手を敬い助け合う気持ちを大事にしている
3. 柔道が強くなることと同時に世の中のためになる人間になることを目指している
4. 柔道をすることによって、人に言われなくても、やるべきことをやれるようになった

研究参加者は上記の項目が自分に当てはまるかどうかを7段階で評定した。

研究参加者

2014年の調査に加えて新たに351名の有効回答を集めた。その結果、調査協力高校は37校、492名の無記名のデータが集められた。その中で全国大会出場校の部員は91名、県と地区大会出場校の部員は358名であり、高校名の記入のない者は43名であった。高校名の記入のあった者のうち男子は350名、女子は85名、無記入は14名であった。

調査を依頼した高校は筑波大学で毎年行われる川村偵三杯に参加した学校や、筑波大学柔道研究室と親交のある学校であり、コーチを通して部員に調査用紙を配布し、回答はコーチの目に触れないように封筒に入れて提出された。

本研究の調査目的と方法は筑波大学体育系研究倫理審査委員会の審査を受けて許可された。

結　果

1 【先行研究の検証】の信頼感に関する8領域の平均値の比較を、本研究の492名と、オーストラリアの大学215名について行った結果は表1に示されている。オーストラリアの大学のデータについては、Zhang & Chelladurai[13]に標本数、平均値、標準偏差が示されているので、それらをもとにして、本研究のデータとの平均値の同等性を確かめるためにt検定を行った。その結果、日本の高校柔道部競技者のコーチに対する信頼感と信頼感に関連する心理状態の認知は、オーストラリアの競技者の認知に比べてポジティブなものではなく、1パーセントレベルの有意差がみられた。簡単に言うならば、日本の高校柔道部のコーチは部員の信頼を受けている水準が、オーストラリアの大学スポーツクラブのコーチよりも低いことを分析結果は示していた。この傾向は、岡田・山口・金丸・市村[9]の研究で研究協力者が141名であったときの結果と同様であった。なお、141名の8領域の評定点の平均値と、351名を追加した計492名の8領域の評定点の平均値の同等性をt検定した結

表1　日本の高校柔道部競技者とオーストリア大学スポーツクラブ競技者の信頼感に関する8領域の平均値の比較　（7段階評定）

			高校柔道競技者	オーストラリア大学		
			N=492	N=215	t	有意差
1	コーチに対する信頼感	M	4.30	5.61	10.75	***
		SD	1.66	1.12		
2	コーチの公正さの認知	M	5.10	5.78	4.43	***
		SD	1.51	1.13		
3	コーチの善意の認知	M	5.20	5.63	3.90	***
		SD	1.57	1.08		
4	コーチの誠実さの認知	M	5.10	5.80	6.72	***
		SD	1.52	1.15		
5	コーチの能力の認知	M	5.25	5.82	4.75	***
		SD	1.66	1.14		
6	コーチへの関与	M	4.61	5.41	7.23	***
		SD	1.47	1.18		
7	コーチへの協力	M	4.65	6.27	16.20	***
		SD	1.15	0.75		
8	成果の認知	M	4.69	5.55	7.90	***
		SD	1.49	1.07		

*** $p<0.01$

果、8 領域のいずれにも有意差は見られなかった。

2 【競技レベルによる信頼感の違い】全国大会出場校の部員（91 名）を（A 群）とし、県・地区大会までの出場校の部員（358 名）を（B 群）として、8 領域の調査項目の評定値の平均値と標準偏差を表 2 に示した。

競技者のコーチに対する認知の 8 領域のすべてで、A 群の平均値は B 群より高い値を示した。特に「コーチに対する信頼感」では A 群は 4.58、B 群は 4.22 でその差は 5%水準で有意であった。また、「コーチへの協力」でも A 群 4.97、B 群 4.61 で A 群のほうが有意に高い値を示した。

その他の領域でも A 群のほうが B 群よりもコーチに対してポジティブに評価する傾向を示したが、統計的に有意ではなかった。

3 【競技レベルと性別の信頼感の違い】A 群と B 群をそれぞれ男女に分けて、4 群を作り 8 領域の平均値の比較を行った結果が表 3 に示されている。

平均値を比較すると、ほぼすべての領域で全国大会出場の男子の平均値が最高で、県・地区大会出場の女子の平均値が最低であることがみられる。これら 2 群の平均値の t 検定の結果は「コーチに対する信頼感」「コーチへの関与」で前群のほうが 5%水準で有意に高い値を示した。しかし、4 群の平均値が同じであるという帰無仮説を一元配置の分散分析で検定すると、8 領域のすべてで有意な差異は認められなかった。

「コーチに対する信頼感」が競技レベルと性別の 2 つの要因によって規定されているかどうかが、2 要因（競技レベル 2 水準、性別 2 水準）の分散分析によって確かめられた（表 4 参照）。

表 4 はコーチに対する信頼感を規定する要因として、競技レベルは 5%以下の有意確率で主効果を持っているが、性別および交互作用の効果はないことを示している。

Zhang & Chelladurai（2013）はコーチへの信頼感は、コーチへの関与、コーチへの協力、成果の認知などを高めることを指摘している。それらの 3 変数への競技レベルと性別の影響が 2 要因分散分析によって確かめられた。コーチへの関与を従属変数としたとき、性別は 5%以下の有意確率で主効果を持っており、男性のほうが高いことが示された。コーチへの協力を従属変数にしたときには、競技レベルが 5%以下の有意確率で主効果を持っており、A 群のほうが B 群より優位に高い平均値を示した。コーチが成果の向上に役立ったかどうかを評価する成果の認知に関しては、競技レベルも性別も有意な主

表 2　コーチへの信頼感に関する選手の認知の競技レベルによる違い

	ACAT の各領域		全国出場 (A 群) N=91	県・地区出場 (B 群) N=358	t	p	有意差
1	コーチに対する信頼感	M	4.58	4.22	2.11	0.04	**
		SD	2.7	2.68			
2	コーチの公正さの認知	M	5.17	5.09	0.40	0.68	
		SD	2.42	2.24			
3	コーチの善意の認知	M	5.34	5.18	0.86	0.39	
		SD	2.48	2.46			
4	コーチの誠実さの認知	M	5.23	5.1	0.76	0.45	
		SD	2.41	2.3			
5	コーチの能力の認知	M	5.38	5.22	0.82	0.41	
		SD	2.86	2.78			
6	コーチへの関与	M	4.76	4.59	1.00	0.32	
		SD	2.01	2.09			
7	コーチへの協力	M	4.97	4.61	2.17	0.03	**
		SD	1.79	2.10			
8	成果の認知	M	4.90	4.66	1.38	0.17	
		SD	2.21	2.19			

** $p<0.05$

表3　コーチへの信頼感に関する選手の認知の競技レベルと男女による違い

			全国出場(A)		県・地区出場(B)	
			男子	女子	男子	女子
			N=62	N=29	N=288	N=56
1	コーチに対する信頼感	M	4.70	4.57	4.33	3.96
		SD	1.62	1.72	1.62	1.68
2	コーチの公正さの認知	M	5.21	5.08	5.16	4.72
		SD	1.61	1.47	1.50	1.51
3	コーチの善意の認知	M	5.43	5.15	5.23	4.96
		SD	1.64	1.45	1.55	1.71
4	コーチの誠実さの認知	M	5.29	5.12	5.14	4.86
		SD	1.66	1.32	1.52	1.59
5	コーチの能力の認知	M	5.47	5.19	5.27	4.86
		SD	1.77	1.52	1.67	1.69
6	コーチへの関与	M	4.85	4.57	4.69	4.20
		SD	1.52	1.19	1.41	1.57
7	コーチへの協力	M	4.49	5.03	4.67	4.35
		SD	1.43	1.15	1.45	1.49
8	成果の認知	M	4.99	4.71	4.70	4.47
		SD	1.55	1.36	1.49	1.47

表4　競技レベルと性別を独立変数としてコーチに対する信頼感を従属変数とした分散分析の結果

信頼感の規定要因	自由度	平均平方	F値	有意確率
競技レベル	1	13.50	5.04	0.03
性別	1	3.57	1.34	0.25
競技レベルX性別	1	0.81	0.30	0.58
誤差	431	2.68		

表5　コーチに対する信頼感のA群の高校の平均値と標準偏差

高校	標本数	M	SD
A1	19	5.11	1.32
A2	13	4.35	0.91
A3	19	4.34	2.05
A4	19	4.08	1.44
A5	10	5.05	1.71
A6	9	5.89	0.84

効果を示さなかった。

4 【信頼感の学校差】信頼感の平均値の学校差を全国大会出場校（A群）で各校の参加者が多い高校について分散分析によって調べた結果は表4・5に示されている。

A群の学校のなかで標本数が約10名以上ある高校6校を選び出し、それらの平均値を比較した。最高はA6校の5.89であり、最低はA4校の4.08で、そのレンジは1.81と広いものであった。6校の平均値を一元配置の分散分析で検定した結果は5%水準で有意な差があると判定された。テューキー法による多重比較によると、A4校の平均値（4.08）とA6校の平均値（5.89）の間には5%水準で有意差がみられた。

B群の学校のなかで標本数が多い高校5校を選び出し、それらの平均値を比較した。最高はB5校の5.05であり、最低はB3校の3.76で、そのレンジは1.29であった。5校の平均値を一元配置の分散分析で検定した結果は5%水準で有意な差があると判定された。テューキー法による多重比較によると、B3校の平均値（3.76）

表 6　コーチに対する信頼感の B 群の高校の平均値と標準偏差

高校	標本数	M	SD
B 1	19	3.82	1.63
B2	17	4.62	0.94
B3	33	3.76	1.58
B4	30	4.75	1.51
B5	19	5.05	1.59

と B5 校の平均値（5.05）の間には 5％水準で有意差がみられた。

これらの結果は、信頼感は同じ競技レベルの学校群の中でも、学校による差、つまりどのようなコーチに指導されているかによって差が出てくることを示唆している。

5 【信頼感と成果の認知との関係】信頼感と「成果の認知」の間の相関関係は表 7 に示された。最も相関関係が高い群は A 群の男子で r=0.67 であり、最も低い群は B 群の男子で r=0.44 であった。表 7 に示された結果によると、競技力が全国大会参加レベルの高校ではコーチに対する信頼感の高さは「成果の認知」と関係があることが示された。

6 【柔道の教育的理念の受容】 柔道の教育的理念が高校柔道競技者にどの程度受容されているかを「嘉納尺度」によって調べた結果、得点の平均値・標準偏差は A 群では（3.79，0.74）、B 群では（3.70，0.77）、高校名不明の 41 名を含む全体で（3.68，0.80）であった。「嘉納尺度」の各項目について自分の考えはまったく当てはまる場合には 7 をあたえ、まったく当てはまらない場合には 1 を、どちらでもなければ 4 をあたえる評定法であるから、4 未満は嘉納尺度の考えには当てはまらない方向を示している。この傾向は競技レベルとは関係ないようであった。柔道の教育的理念は高校生柔道部競技者によって十分には受容されていないようであった。さらに嘉納尺度の得点と信頼感の関係が積率相関係数を求めることによって調べられた。その結果、標本全体（N=492）では 0.26 と低いものであった。競技レベル・性別で分けられた 4 群でも積率相関係数は低いものであった（表 7 参照）。

考　察

本研究の仮説の一つは、コーチに対する競技者の信頼感とそれに関係する心理状態は、競技レベルによって異なり、競技レベルの高い学校の生徒のほうがポジティブな回答を示すだろうということであった。その仮説を設定した理由は、競技レベルの高い柔道部に所属していれば、コーチの指導を十分に受けていると思われたからである。本研究の結果ではその仮説はある程度証明されたようにみえる。しかし、競技レベルが高ければ、よい指導を受けており、コーチは信頼されていると結論付けることはできない。

競技レベルの高い A 群に属する高校の中にも、コーチに対する信頼感の高い学校も低い学校もあり、その差はかなり大きい。競技レベルの高くない B 群に属する高校の中にも、信頼感には学校差が大きい。B 群で問題なのは信頼感の評定点が 7 段階で 4 以下の学校が複数校存在することである。生徒たちの気持ちは「信頼しない」方向に傾いていることである。

岡田・山口・金丸・市村[9] の研究で、日本の高校柔道部のコーチたちへの信頼感がオーストラリアの大学運動部のコーチに対する信頼感より低いことが報告された。本研究では、標本数を 141 から 492 に増やしたが、その傾向は変わらなかった。本研究で新たに得られた結果は、コーチに対する信頼感は競技レベルの高い群で高い傾向にあることである。この結果は岡田等（2015）の研究の考察の項で提示された「競技レベルの高い高校のコーチは熱心に指導しているはずだから、信頼感も高いだろ

表 7　信頼感と「成果の認知」および「嘉納尺度」との相関係数

	全体	A 群		B 群	
標本数	(492)	男子(62)	女子(29)	男子(288)	女子(56)
信頼感と「成果の認知」	0.50	0.67	0.60	0.44	0.52
信頼感と「嘉納尺度」	0.26	0.29	0.13	0.31	0.33

う」という仮説を支持するものであった。しかし競技レベルの高低とは関係なく学校差も大きく、信頼感の水準もオーストラリアのデータより低いものであった。日本の高校サッカー部におけるコーチ―選手の人間関係の研究では、信頼感は柔道より低いものになっている（木幡日出男, 岡田　弘隆, 石井辰典, 夏原　隆之, 市村　操一, 印刷中）[5]。このような対人的信頼感の低さは高校生の年代の精神発達的特徴なのか、スポーツの場だけに限らない、教育の場の文化的傾向なのかを考える必要もあるだろう。しかし、スポーツ心理学はこのような結果を踏まえて、コーチに対する信頼感の研究を次の段階に進める必要があると思われる。

一つの方向は、コーチ個人の要因の研究である。どのような人柄のコーチなのか、どのような指導能力を持っているかという人格的要因もあろうし、どの程度頻繁に指導し、どのような声掛けをしているかというような行動的要因もあろう。さらには、どのような勤務状況のなかで指導しているのかという社会的要因もあろう。2015 年の 8 月にカナダの高校スポーツ連盟である School Sport Canada は高校の教師兼コーチの全国実態調査を発表した（Camiré and Colin）[4]。カナダの青年のスポーツの場は日本と同じく学校運動部であり、そこでのコーチも日本と同様に教師兼無給コーチであり、英語で Teacher-Coach と表現される。3357 名の教師兼無給コーチの調査の結果は、「時間のやりくりの苦労」「家族との時間のなさ」「同僚教員の理解と協力のなさ」などの困難があることを示している。日本の状況によく似ており、コーチの信頼感を高め、コーチングの質をよくしていくためには、このような社会的要因も考慮されなければならないだろう。

今後必要となる研究のもう一つの方向は、信頼感を含めたコーチ―選手の人間関係を良好なものにする心理的介入の研究であろう。コーチから競技者に働きかける心理的介入を実施する際には、Zhang & Chelladurai[13] があげている信頼感の前提条件を高めるような方法が考案されるとよいだろう。

嘉納治五郎が書き残した柔道の教育的理念が競技者の生活全般の中で生かされているレベルを調べる質問に対する回答では、現代の高校生柔道競技者には十分には内面化されていないという結果が示された。この結果の原因は多様に考えられる。彼らが柔道を行う動機に人間形成的側面が初めから含まれていないのかもしれない。あるいは柔道の指導者から人間形成的側面の話を聞く機会がなかったのかもしれない。そして、教員である柔道指導者が、教員養成課程で嘉納の柔道の思想に接する機会がなかったのかもしれない。この問題はさらに研究が必要であろう。

結　論

1　高校柔道競技者のコーチに対する信頼感とそれに関する心理を調査する質問紙（ACAT）を実施し、25 校 351 名の有効回答を得た。その結果 2015 に発表した 12 校 141 名の調査結果と有意差のない評定点の平均値を得た。その結果、「信頼感」とその前提条件である「公正さ」「善意」「誠実」「能力」と、結果と考えられる「関与」「協力」「成果の認知」、いずれについてもオーストラリアの大学生競技者より低いことが再確認された。

2　ACAT で測定された信頼感を含めた 8 領域の平均値について、チームの競技レベルの違いを（全国大会出場校競技者 91 名）（A 群）と（県・地区大会出場校競技者 358 名）（B 群）を比較した結果、「信頼感」と「協力」の 2 領域で A 群のほうが有意に高いことが示された。さらに、競技力のレベルと性差の 2 要因を独立変数とし、ACAT の 8 領域のそれぞれを従属変数とした分散分析の結果、「信頼感」「関与」「協力」で競技力のレベルが主効果を示した。性差は有意ではなかった。

3　A・B 両群の中でも、「信頼感」に関して学校差がみられた。

4　「信頼感」の高さは、「成果の認知」と高い相関関係にあることがわかった。

5　柔道の教育的理念は「信頼感」とは関係なく、高校柔道競技者に受け入れられているレベルは低いものであった。

引用文献

1）　天貝由美子（1997）：成人期から老年期に渡る信頼感の発達―家族および友人からのサポート感の影響―．教育心理学研究，45, 79–86

2）　Bakiev E（2013）：The influence of interpersonal trust and organizational commitment on perceived organizational performance. Journal of Applied Econommics and Business Reserch. 3（3）, 168–180.

3）　Bliek R D（2015）：Does interpersonal trust increase productivity? An empirical analysis between and within countries. Online Social Science Research Network, Posted date January 20, http://ssm.com/abstract=2552436

4）　Camiré M & Colin J（2015）：National Survey of Canadian High School Teacher-Coaches: National

Report of School Sport Canada.
5） 木幡日出男，岡田弘隆，石井辰典，夏原隆之，市村操一（印刷中）：高校サッカー競技者とコーチとの人間関係についての検討．東京成徳大学研究紀要，1961，March.
6） Leana C R Van Buren H J（1999）：Organizational social capital and employment practices. Acade Manage Rev. 24, 3, 538−55.
7） Mayer R C Davis J H Schoolman F D（1995）：An integrative model of organizational trust. Acad Manage Rev. 20, 709−35.
8） 村田直樹（2011）：嘉納治五郎師範に学ぶ　日本武道館　東京.
9） 岡田弘隆・山口香・金丸雄介・市村操一（2015）：高校柔道部員の感じているコーチに対する信頼感．筑波大学体育系紀要．38，69−76.
10） Six F E（2007）：Building interpersonal trust within organizations: A relational signaling perspective. J Manage Governance. 11, 285−309.
11） 生誕 150 周年記念出版委員会（2011）：気概と行動の教育者　嘉納治五郎　筑波大学出版会.
12） 山口香（2013）：日本柔道の論点　イースト・プレス　東京.
13） Zhang Z & Chelladurai P（2013）：Anticedents and consequences of athlete’s trust in the coach. Journal of Sport and Health Science. 2, 114−121.

付表　競技者によるコーチの信頼感、その前提条件と結果

調査項目

（信頼）

1 私は私のコーチと、自分の考えや感情や希望を自由に話し合える

2 私は自分にとって重要な課題や問題をコーチに気軽に相談できる

（公正さ）

3 私のコーチはすべての競技者の努力の結果をプラスに評価する

4 私のコーチは競技者たちを公平に扱おうとしている

5 私のコーチは強い正義感をもっている

（善意）

6 私のコーチは私にとって大切なことは何かによく考えてくれる

7 私のコーチは私の要求や希望をとても尊重してくれる

8 私のコーチは面倒がらずに私のことを助けてくれる

（誠実）

9 私のコーチは私に誠実に対応してくれる

10 私のコーチは私にいつも真実を語る

11 私のコーチの態度や行動には一貫性がある

12 私は私のコーチの価値観が好きだ

（能力）

13 私のコーチは私たちの競技成績を高めてくれる特殊な能力を持っている

14 私のコーチはコーチの仕事の仕事をするのにきわめて有能である

15 私のコーチはやろうとすることを成功させる人だという評判だ

16 私は私のコーチの技能に非常に信頼を感じている

17 私のコーチはコーチの仕事について豊富な知識を持っている

（関与）

18 チームに入ってから、私の価値観とコーチの価値観はだんだん似てきた

19 私は私のコーチと親密な間柄の感じを持っている

（協力）

20 私は私のコーチの仕事がうまくいくように進んで協力している

21 私は私のコーチとすすんでコミュニケーションを行っている

（成果の評価）

22 コーチの指導によって今シーズンの私のチームの成績は向上した

23 コーチの指導でシーズンの目標をこれまでに十分に達成できた

24 コーチの指導で前のシーズンと比べての私の成績は向上した